

## 特集／途上国研究のための研究ツール—新・旧書誌情報を活用する

# 『日本における中東・イスラーム研究文献目録』とデータベース

三浦 徹

東洋学の領域では、英語でいうレファレンス・ブックのことを、「工具書」と呼ぶ慣しがあり、大学の歴史学の授業で、工具書の意義を、料理に喩えて説明することがある。材料（食材）にあたるのが史料で、調理道具がなければまたその使い方がわからなければ、料理は作れないのと同様に、史料や論文を読み理解するには、工具書（辞典や事典、地図、文献目録など）が必要となる。文献目録は工具書のひとつであるとともに、工具書を含む文献検索のツールである。

一九九一～九二年に刊行された『日本における中東・イスラーム研究文献目録』および『索引』（東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター編集・発行）は、刊行当時から学生の教育・指導に役立つという声をよく聞いた。

さらにこの文献目録は、文部省学術情報センター（現国立情報学研究所）と連携して科学研究費補助金を申請し、一九八九年以降の文献についても追補し、データベースとして一九九六年からユネスコ東アジア文化研究センター（以下ユネスコ・センタ

ーと略記）のウェブサイトおよびNACSIS-R（現NII/DBR）学術研究データベース・リポジトリ）で公開されるようになった。利用者は、著者名、文献標題などから任意に検索をすることができる。学部学生自身が、卒業論文はもとより、課題レポートの下調べなどでも簡便に日本語文献を検索できる。

筆者は、この文献目録の編纂に携わり、その後も文献目録データベースの補遺編集に関わってきた。その経験から、今後の文献目録のあり方を考えてみたい。

### ●中東・イスラーム研究文献目録

本目録は、一九八八～八九年にユネスコ・センターで編集・刊行した『日本における中央アジア関係研究文献目録』の姉妹版にあたり、佐藤次高氏（当時同センター副所長、現早稲田大学教授、東洋文庫研究部長）の発案によって企画された。ユネスコ・センターは、日本における東洋学研究の情報を国際的に発信することを任務としており、明治から昭和まで（一八六八～一九八八年）の日本における中東・イスラーム

研究の文献目録をまとめ、それに外国語の表題を併記したうえで目録として刊行することをめざした。編集作業は、主に中東・イスラームを専攻する大学院および学部の学生約四〇名で、私は一九九〇年から作業責任者として編集にあたり、開始から計四年で刊行に漕ぎ着けた。

この目録の特徴はつぎの点にある。既存の文献目録等から収集して一万二〇〇〇件の基礎データベースを作成し、それをすべて現物にあたって文献データを確認するとともに、新たな文献の調査収集を行ったことである。具体的には、基礎データに掲載誌として登録された雑誌等逐次刊行物九〇〇誌は、現存する全部の号について中東・イスラームに関わる文献の有無を確かめた。叢書や論集などについても同じように現物にあたることで新たな文献を渉猟した。

このような作業方法をとることで、目録の収録文献数は、当初の予定を大幅にこえることが予想された。このため、収録の範囲は、「イスラーム時代以降の中東地域」を対象とするものとし、一時的な時事情報は対象外とし「研究」文献に絞った。他方

で、「日本と中東」の部門を設け、日本と中東との交渉史、中東に関わるエッセイや旅行記、第二次世界大戦前の海外事情報告についてはここに収録し、日本および日本人の中東との関わりが分かるようにした。

収集した文献データは二万件を越えたが、以上のような方針で整理を行い、約一万五〇〇〇件の著作（論文、単行本など）を、一四の大分野と五三の小分野にわけて収録した。

文献の編纂作業で難しかったことは、第一に、採否の判断である。収録対象は「地域は中東、時代はイスラーム以降」と定め、地理的範囲は歴史的に伸縮するため、グレーゾーンを設けざるをえない。具体的には、歴史的に深い関連をもつバルカン、コーカサス、アンダルスは対象に含めることとした。また国際政治や国際経済などの分野では、論考の一部で「中東&イスラーム」が扱われる文献も多い。これについては一律の基準は定めがたく、叙述の「質と量」で中東に過半のウエイトがあるかどうかを基準とし、同時に文献の総数が少ない分野（科学・技術、社会学など）では緩やかな基準で採択した。

第二には、著者名の確認で、日本語の文献では、著者名の読みや外国人著作者のアルファベット表記や姓名の区別をつけることが必ずしも慣行となっていない。しかし、これらが確定しないことには、著者名の同定や配列ができないのである。

国立国会図書館やアジア経済研究所図書館などの所蔵機関は、現物確認のための便宜をはかってくださり、研究者もさまざまな照会に快く協力をしてくれた。日本で初めての「総合文献目録」を作るということで、学界全体の応援をうけているように感じられた。

### ●データベースの公開

刊行後は、ユネスコ・センターによって一九八九年以降に刊行された文献の補遺を追加しウェブサイトで公開が行われた。収録文献数は、二〇〇一年までで二万五〇〇〇件を越えた。しかしユネスコ・センターは、その運営資金を提供していた文部科学省の方針により二〇〇三年三月をもって閉鎖となり、文献データベースは過去の遺産になりかかった。

その事業を引き継いだのが、日本中東学会である。日本中東学会は、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を申請し、二〇〇三～〇四年度と〇六年度の三度にわたって採択され、文献目録の補遺を編集するとともに、同学会のウェブサイトで公開している。ここでは、「日本における中東研究文献データベース一九八九～二〇〇七」と名付け、イスラーム以前の中東に関わるものも含めて、文献データの収集を行っている。二〇〇七年末の時点で約一万四〇〇〇件の文献を収録・公開し、毎月平均二〇〇〇件のデータを追加している。

編集には、三通りの情報源を用いている。第一は、学会ウェブサイトにて学会会員等による「新規業績」（過去一年を対象）の登録欄を設け、新規文献情報を毎週更新している。二〇〇七年の毎週の掲載数は平均一五件程度である。第二は、二〇〇三～〇四年度に日本中東学会および日本イスラーム協会、日本オリエント学会の会員を対象にしたアンケート調査を実施した。ここでは、学会の文献データベース編集室で把握している文献データを照会し、これを修正・追加する形で情報を収集した。第三は、独自に図書館などで調査した文献情報である。

学会の編集に移ってから大きく変わったことは、著者自身が文献を自分で申請・登録する方式を取り入れたことである。これによって、リアルタイムに情報が収集できる反面、自己申告ゆえにどのような文献を登録するかという基準を定めることはできず、情報提供者によって、情報の質に粗密が生じてくる。

二〇〇七年度以降は、人間文化研究機構で開始された「イスラーム地域研究」プログラムの東洋文庫拠点と連携して、事業を継続している。当該文献データベースのノウハウと情報収集のネットワークをもつ日本中東学会が文献データベースを編集し、これを、日本中東学会および東洋文庫拠点のウェブサイト双方で公開するという形である。将来的には一九八八年までの本体データベースと一九八九年以降の補遺デー

データベースの統合が課題となるが、それにむけて、このような連携の形をとっている。

## ●文献目録とデータベースの効用

文献目録あるいは文献データベースの用途は文献の検索であり、検索能力が生命を決する。

一九九一年の冊子体目録刊行の反響は大きく、初刷の一〇〇〇部は二カ月程度で在庫が無くなり、誤植などの修正をした二刷が刊行された。とはいえ、分厚い冊子体での利用は、普及の面では限界があり、また用語索引が作成されていないため、検索には多少の労力と困難が伴った。

データベースでは、利用者は、任意に検索ワードを定めて検索をすることができるので、学部学生などの初級者、ジャーナリストや教員、あるいは中東を専門にしない研究者が、関連の文献を拾い出すことができる。この点で、データベースの利用価値は極めて高く、中東研究のすそ野を広げる役割を果たしている。実際に、日本中東学会サイトのアクセス数は月一〇〇〇回という高い頻度を示している。

便利な反面、過信の危険もある。冊子体にせよデジタルデータベースにせよ、完全に網羅的な文献目録は存在しない。また、検索の方法にも制約される。当該データベースでは、文献情報（著者名、標題、掲載誌・掲載書名、出版元、出版地など）と地域・分野のキーワードを検索対象として

設定している。このため、東洋文庫の本体データベースの検索では、「カイロ」という語で検索すると同音の語（たとえば「回路」）が文献情報のいずれかに含まれると検索されてしまう（なお、日本中東学会の補遺データベースでは文献情報の検索上の区分を設け、より確実な検索ができる）。逆に、標題等に利用者が設定した検索語が含まれなければ、該当する文献であつても検索の網にかからず落ちてしまう。文献目録・データベースは、あくまでもツールであり、これを過信し検索でヒットしないから研究がない、と思ひこむと大きな間違いを犯すことになる。

他方、文献目録を使った、日本と中東との関係史に関わる研究が現れた。代表作は、杉田英明氏の『日本人の中東発見』（東京大学出版会、一九九五年）である。また、近年、第二次世界大戦前の大日本回教協会などの資料の発掘・整理の動きも生まれている（早稲田大学イスラム文庫など）。

## ●文献データベースの維持と統合にむけて

今日では、明治から現在までの、日本における中東研究をほぼ網羅した形の文献目録データベースを利用して、研究や教育を行う環境ができてきている。これは他の分野では類がないことで、例えば、東南アジアやアフリカ、アメリカや中国といった地域の総合文献目録はまだ作成されていない。ま

た、英、仏、独、北米など長い中東研究の蓄積をもつ諸国でも、諸分野を包含した総合的な地域研究の文献目録やデータベースは編纂されていない。ここでは、分野が多岐にわたり文献数が過大なことが障碍となっている。日本において、このようなことができたのは、時期的な問題が影響している。すなわち、一九八八年という時点でいったん総合的な網羅的な文献目録を編纂しえたがゆえに、その後は「補遺」という形でフォローしていくことが可能となった。

一九九〇年の湾岸危機、二〇〇一年の九・一一事件、二〇〇三年のイラク戦争という国際的な事件とともに、研究文献数は一九八〇年代前半の年六〇〇〇件から九〇年代には年一〇〇〇件を越え、一九八九年以降の登録文献数は約一万九五〇〇件に及んでいる（表1参照）。これは、中東への関心の高まりの反映でもあり、また「イスラーム地域研究」をはじめとするナショナル・プロジェクトが始動し、中東に関わる研究者や学生の数も倍増している。一九八〇年代末の時点でこのような目録を編纂することがなければ、その後の文献数の急激な増加に追いつくことはできなかったろう。また、その時期にパソコンで稼働できるデータベースソフトが開発され、これを駆使して、文献目録の編集ができたことも大きい。さらに一九九〇年代にはウェブサイトでデータベースとして公開できるようになったことも追い風となった。



表1 年代別収録文献数 (2007年12月末現在)

| 年          | 文献数    | 年平均     |
|------------|--------|---------|
| 文献目録 (冊子体) |        |         |
| 1868-1904  | 166    | 4.6     |
| 1905-1930  | 907    | 34.9    |
| 1931-1945  | 1,685  | 112.3   |
| 第二次世界大戦前   | 2,578  |         |
| 1945-1949  | 67     | 13.4    |
| 1950-1959  | 902    | 90.2    |
| 1960-1969  | 2,174  | 217.4   |
| 1970-1979  | 3,766  | 376.6   |
| 1980-1988  | 4,617  | 546.3   |
| 計          | 14,284 |         |
| 補遺データベース   |        |         |
| 1989-1998  | 11,743 | 1,174.3 |
| 1999-2007  | 7,674  | 852.7   |
| 計          | 19,417 |         |

私たちの課題は、このような世界的にも類のない貴重な文献データベースを維持し、発展させていくことであろう。中東研究のように、政治経済から文化まで、また多言語多地域に広がる研究領域の文献目録を、単一の機関の力で編纂することは将来的にも困難であろう。まず、日常的に研究者自身が自分の業績を管理し登録することを望みたい。もちろん、自己申告だけでは網羅的な文献データベースはできない。五年ぐらいの間隔で一斉点検調査と補充作業が必要になるであろう。

さきの「イスラーム地域研究」東洋文庫

拠点は「イスラーム史資料の開拓」を課題とし、本文献データベースの更新事業とともに、中東諸語の現地語資料の書誌データベースの整備を諸機関との連携のもとに進めていく計画である。

研究のツールの基盤整備なくしては研究の進展はありえない。また日本と中東・イスラーム地域の関係が国内でも国外でも日常的に問題となってきた今日、その理解を深めていくうえで、この文献データベースの役割はきわめて重要である。しかし、文献の存在を確認するだけでは不十分で、当該文献に容易にアクセスできることが必要である。この文献目録では、ジャーナリストや小中高の教員など対象を広く想定して編集を行ってきた。しかし、一般の図書館では学術雑誌や研究書を閲覧することは難しい。電子ジャーナルをはじめとする文献そのもののオンラインによる公開を、併行して構想していく必要があるだろう。

(みづら とおる／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授・副学長)

《参考資料》

- ① 東洋文庫文献データベース ([http://www2.toyo-bunko.or.jp/Database/CA\\_ISLM\\_QueryInput.html](http://www2.toyo-bunko.or.jp/Database/CA_ISLM_QueryInput.html))。
- ② 日本中東学会文献データベース (<http://www.soc.ni.ac.jp/james/james/database/data-base.html>)。

base.html)。

- ③ 国立情報学研究所学術研究データベース・リポジトリ (<http://dbrnii.ac.jp/>)。

- ④ 三浦徹「日本の中東・イスラーム研究—日本における中東・イスラーム研究文献目録」の刊行によせて」『月刊百科』第三六五号、一九九三年三月(同英語・アラビア語版) 『Islamic and Middle Eastern Studies in Japan Using Bibliography of the Islamic and Middle Eastern Studies in Japan 1868-1988 to Identify Research Trends』 *Le Monde Arabe dans la Recherche Scientifique*, No.5, 1995)

『Survey of Middle East Studies in Japan: Historical Development, Present State, and Prospects』 *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, No.19/2, March 2004

【付記】 本稿の執筆にあたっては、ユネスコ・センターおよび日本中東学会において約二〇年にわたり、文献データベースの編纂に尽力されている後藤敦子氏から、情報提供などのご協力をいただいた。